

特別記事

理学療法士が活躍するマンガ、知っていますか？

境界のエンドフィール(集英社) 近藤たかし(原作)、アントンシク(漫画)

「関節は曲げようとする筋肉だけでなく反対の筋肉が伸びることでスムーズに曲がるんですよ」「上肢の方はまだ関節がゆるいインピンジメントに気をつけないと…」

これはいずれも、あるマンガの登場人物のセリフである。

名は瀬戸真人、職業は理学療法士で『境界のエンドフィール』(集英社)の主人公だ。瀬戸は33歳ながら2年目の新米理学療法士。というのも、瀬戸はある事件をきっかけに刑事を辞め、「人を支える仕事」である理学療法士になった経歴をもつ。本書は、その事件の容疑者と思われる意識不明の女性患者(香庄智子)を通じて、今度は医療者として瀬戸が事件に相對することになる、リハビリテーション科を軸に描かれる医療×サスペンスストーリーである。

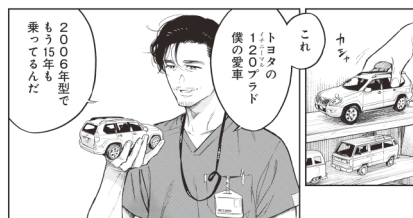
事件を巡るストーリー展開に加えて、リハビリテーション科が舞台ということもあり、本誌読者にとってはもっと別の楽しみがあるかもしれない。リアルな臨床場面に「あるある」と頷いたり、登場人物らのクリニカルリーズニングが今の担当患者の臨床のヒントに

なったり、学生であれば将来勤務するときのイメージが具体化されたりするのではないだろうか。

実際に作中、瀬戸が香庄以外で最初に担当するのは変形性膝関節症の男性である(第1巻Feel:3〜)。患者は「脚が痛い」と言って理学療法に後ろ向き。問診、触診の結果、男性を怒らせてしまった瀬戸は上司の技士長に相談する。「他人にとってはボンコツでも…僕にとっては色んな所に連れて行ってくれた相棒なんだ」、「身体だって同じだね」、「推理が必要なのは刑事だけじゃないよ」と技士長からヒントをもらい、患者背景、症状から再度クリニカルリーズニングを行い、触診し直す。原因とその対応を、本誌読者も一緒に考えてみてほしい。

「自分らしい生き方を取り戻す」ことを支える、対人援助職としての至言も随所に出てくる。脳梗塞後に肺炎で入院した結果、立ち上がることができなくなった女性患者(第3巻Feel:17〜)に対して、瀬戸はちょっとした工夫を施すことで「夫の誕生日に、以前のように立ってみせられた」と思う経験をつくった。成功体験により患者を前向きな気持ちにすることを意図した粋な計らいである。

「時にはこういう儀式が人生の支えになることだってあると思うんです」という瀬戸の言葉は、刑事から理学療法士に転職する際のけじめの儀式的経験から出てき



変形性膝関節症患者への対応を相談するこのシーンは、本誌編集委員であり、監修を務める高橋哲也先生の実体験がもとになった。

たものかもしれない。

身体だけでなく心までも癒すリハビリテーションチームは、果たして容疑者をどう癒すのか。今後の展開に期待が高まる。

(本誌編集室)

●境界のエンドフィール(既刊4巻)

近藤たかし(原作)、アントンシク(漫画)

B6判、集英社刊

画像はすべて集英社提供



香庄の理学療法場面、関節間のトレードオフがわかりやすく説明されている。